

中級から学ぶ日本語  
三訂版

別テーマ

# 教え方の手引き

松田浩志 亀田美保

KENKYUSHA



## 目 次

『教え方の手引き』を使っていたかく先生方へ v

第 1 課	まなぶ	〈なぞなぞ〉……………	1
第 2 課	みつける	〈花の名前〉……………	7
第 3 課	たべる	〈ごちそう〉……………	12
第 4 課	たとえる	〈猫に小判〉……………	17
第 5 課	あきれる	〈満員電車〉……………	23
第 6 課	つたえる	〈思いやり〉……………	30
第 7 課	かざる	〈名刺〉……………	38
第 8 課	おもいこむ	〈男の色・女の色〉……………	44
第 9 課	まもる	〈見えない相手〉……………	50
第 10 課	なれる	〈腕時計〉……………	57
第 11 課	つながる	〈タテとヨコ〉……………	64
第 12 課	わける	〈ABOAB〉……………	69
第 13 課	おもいだす	〈昼のにおい〉……………	74
第 14 課	みなおす	〈てるてるぼうず〉……………	81
第 15 課	ふれあう	〈旅行かばん〉……………	86
第 16 課	うたう	〈歌の力〉……………	92
第 17 課	なおす	〈命〉……………	99
第 18 課	はなれる	〈ふるさと〉……………	104
第 19 課	かなえる	〈ふたつの夢〉……………	110
第 20 課	おぼえる	〈ものづくり〉……………	116



# 『教え方の手引き』を使っていたいただく先生方へ

## 1. 本書の概要

『テーマ別 中級から学ぶ日本語 教え方の手引き』(以下、『手引き』)は、『テーマ別 中級から学ぶ日本語』(以下、『中級』)に準拠して、『中級』を使っていたいただく先生方に、より効果的に使っていたいただくことを目的に書かれています。

### 1) 学習者にとって、いかに受け入れやすいか

初級段階を終えた学習者を対象に、『中級』を教えるときに、新しく学習する項目をどのように紹介し、練習をすれば、受け入れやすく、身につけやすいかということを重視しました。具体的には、〈新しい言葉〉での語彙・表現の提示の仕方を工夫し、また、〈使いましょう〉で、視点を変えた新規学習項目の導入方法を提案することにしました。

### 2) 先生方とともに考える

学習者が受け入れやすい説明をするために、これまで『中級』を使っていたいただいた先生方や学習者の皆さんから寄せられた意見、著者の経験を最大限に生かすよう作成しました。その結果、こう教えるべきだと規範的な書き方をするのではなく、日本語教育に携わっておられる先生方に、こうしてみてもはどうでしょうかと提案し、ともに考える立場を重視しました。中には、こんな簡単なおもわれる説明があるかもしれませんが、日本語教育現場の先生方の経験も様々であるという観点から、あえて取り上げました。

### 3) 国内外での日本語教育現場も視野に

上の1)で述べた「学習者」には、日本国内とは事情の異なる学習環境で日本語を学ぶ人たちも視野に入れると同時に、日本語を国外で外国語として学習された先生方もいらっしゃるという点を考慮し、できるだけ「完了」「アスペクト」「連体修飾」などといった言葉を説明に使わないように努めました。日本で英語教育を受けた私たちが「分詞構文」「関係代名詞」「補語」などの言葉は覚えても内容はなかなか根づかないことを考え、国外の学習者や先生方、とりわけ非漢字圏の人たちにはわかりにくいだろうとも考えた結果です。時に、まどろっこしいと思われる説明もあるかもしれませんが、このような理由からです。

こうした方針の下で、『手引き』は、教育現場で実際に活用されることを第一の目的として作成しました。『テーマ別 中級から学ぶ日本語』初版が発行されてから、ほぼ四半世紀になります。この『手引き』が、日本語教育に携わっておられる先生方へ学習項目の導入方法を提案するに留まらず、日本語教育全体についてともに考えるよすがになってくれればと願い、『教え方の手引き』と名づけました。ここでの提案が、共有できることは共有し、改善すべきことは改善するという現場での作業につながり、日本語教育全体にとって少しでも益になれば幸いです。

## 2. 『手引き』の構成と表記

各課は、次の「3. 各セクションの詳細」で詳しく述べるように、6つのセクションから構成されています。わずらわしさを避けるために、ここでは、全課に共通する留意点や、練習方法の例が述べられています。また、〈答えましょう〉〈使いましょう〉〈まとめましょう〉については、課ごとに「解答例」がつけてありますが、「模範例」ではなく、あくまでも考えられる解答のひとつを例として書き添えたものです。

『手引き』の「解答例」では、漢字や語彙・表現は、『中級』の学習順に合わせて、既習のものだけを用いる方針としました。ただし、説明文や例文などその他の箇所では、特にそうした制限なしで、漢字や語彙・表現を使っています。また、例文の中には「<sup>x</sup>」や「<sup>?</sup>」の記号をつけたものがありますが、それぞれ「正しくない文」、「間違っていないが、受け入れにくいと考えられる文」を示しています。

## 3. 各セクションの詳細



### テーマ

『中級』各課に設けられたテーマについて、関連する情報とともにテーマのどこに焦点を絞って授業に組み込むことを目指しているかという点を、簡単に説明してあります。



### 新しい言葉

新しい課に入って最初に新しい言葉を練習する時間が設けられますが、課が進むにつれて新しく紹介される語彙・表現の数も増え、限られた時間内でいかに効率的で、効果的な時間の使い方をすることが問われることとなります。語彙・表現などの読み方、発音練習などは、どうしても必要な作業ですが、そのほかにぜひこの時間に押さえておきたいと思われる点がいくつかあります。

〈新しい言葉〉のセクションでは、学習者が練習した語彙・表現をできるだけ使えるように紹介するという立場から、いくつかの新語・表現を取り上げ、辞書に載せられている可能性の少ない点を中心に説明を添えています。しかし、ここで取り上げた語を必ずしも授業で扱わなければならないというわけではありませんし、それ以外の語で、練習が必要な語もあるでしょう。また、各課共通でぜひ説明しておけばよいと考えられる点があります。その点を以下に少し詳しく述べます。

### ¶ [名詞] について

新語・表現練習の時間に名詞を扱うときに、学習者にとって役に立つと考えられる情報を6点あげておきます。

①名詞の意味に留まらず、その名詞とともに慣用的に使われる動詞、形容詞、特に辞書に載っていないと思われる使い方を紹介しておく、学習者が使うのにすぐに役立つと考えられます。

『中級』では、「手を借りる」などの辞書の見出しに出てくる慣用的な表現は、〈新しい言葉〉に取り上げられています。それとは別に、辞書には載っていないけれども、名詞と一緒に慣用的に使われる動詞、形容詞を紹介しておけば、役に立つと思います。

たとえば、初級段階で電話を「かける」ことを学んだ学習者が、電話を「切る」ことを知らなかったりします。ほかにも、「掃除機」という名詞を例にとると、学習者は意味がわかっているだろうと簡単に扱いがちですが、たとえ意味はわかっている、使えるのは「掃除機で」「掃除機を使って」という形ではないでしょうか。ここで、「掃除機をかける」という、ともに使う語を紹介すれば、役に立つと考えられます。

「力」は、第16課で「力を入れる」という形で取り上げていますが、「力がある／ない」「力が強い／弱い」なども、あわせて紹介すると、学習者の語彙が増えることにつながるのではないのでしょうか。同様に、「態度」は、「態度が大きい」とは言っても「小さい」とは言わない点や、「保険」は、「に入る／をかける／がおりる」と組み合わせる使うという点など、学習者には必要な情報です。

すべての例をあげるわけにはいきませんが、新しい言葉を紹介する際に、「知っているはずだ」と思い込まず、辞書に載っていないもので、学習者に役立つ、慣用的な使い方がないかどうか考えてみる必要があると思います。

②**絵や画像を有効に使う**ことも大切です。第4課に「小判」が出ていますが、「昔のお金で、丸くて…」と言葉で説明されても学習者にはイメージしにくいと思われます。歴史的、あるいは、文化的な背景を持った言葉や、「にっこり笑う」「にたりと笑う」などは、言葉ではなく、絵や画像を準備しておけば、時間の節約にもなるし、学習者も理解しやすいと思います。「2LDK」や「ホームセンター」なども、国外で日本語を学習する人たちには、絵や画像が有効でしょう。

③**数は多くはありませんが、その1語単独で使うことの少ない名詞は、その点を指摘し、どう使うか説明しておく**とよいと考えられます。『中級』では、第10課の「海外」、第17課の「医療」などがその例です。学習者の知っている言葉を使って、「海外生活／旅行／出張」、「医療問題／技術／施設」などを紹介すれば、学習者が新しく学んだ言葉を活用することにつながります。もちろん、「医療」も「海外」も、1語で使うことは絶対ないと言い切れないかもしれませんが、中級段階の学習者にとっては、そのグループに入れて紹介してもよいと思います。

④上の③と関連しますが、**1語では使われず、必ず前にほかの言葉や表現をつけて使う名詞も、その点を指摘しておく**と学習者にとっては役に立つと思われます。『中級』では、「途中」(第5課)や「くせ(に)」(第8課)「瞬間」(第13課)などがその例です。前に使われる言葉や表現は名詞によって違いますから、その点も触れておくとうよいでしょう。単語に限らず、「音／におい／感じ／気がする」などもこのグループとして扱うとよいと思います。

⑤**理解するのに時間のかかる名詞**、たとえば、「気持ち」「気分」「機嫌」などは、学習者が日本語の学習を進めていくにつれて理解を深める言葉だと考えられます。後の形容詞のところでも触れますが、そうした言葉は、本文が理解できる程度の説明で済ませておき、後にさらに理解を深めてもらうように扱うのがよいでしょう。

⑥**動詞として使われる名詞**には、『中級』では、「確認<sub>スル</sub>」と表示をしました。その点も慣れてもらい、動詞としても活用できるようにすると役に立つと思います。

## ¶ [形容詞] について

新語・語彙の時間に形容詞を扱うときには、次のような点に留意すると学習者には役に立つと

思われます。

①感情・感覚の形容詞については、初級の段階で「悲しい／痛い」などがほかの形容詞とは異なり「私（たち）は悲しい／おなかが痛い」と使われ、「<sup>\*</sup>姉は悲しい／おなかが痛い」とは使われないことなどを学習していると思われませんが、『中級』では、「～て／でたまらない」（第5課）「～て／でならない」（第18課）を練習するときに、形容詞のグループを意識しておくと便利です。新しい形容詞を紹介する際にその点に触れておくとういと思えます（第5課〈使いましょう〉Bの「～て／でたまらない」の説明に、この種の形容詞の目安をあげておきました）。

②形容詞は、名詞の前と文末で使われますが、たまに、**文末でだけ使われる形容詞**があります。『中級』では「心配」（第1課）のみです。「心配なこと」という使い方がありますが、この場合は「心配事」という名詞のほうが多用されるようです。

ここで大切なことは、中級段階では、文末で使うことのほうが多いという形容詞については、その点を説明に加えると学習者が使っても間違えることが少ないという点です。「安心」（第7課）もそのひとつではないでしょうか。

③初級段階で、「うるさい」と「にぎやかな」には、それぞれ、大きな音に対する話し手の批判と賞賛の気持ちが入っていると習っています。はっきりと話し手の評価を含む形容詞の場合、その点に触れることは大切です。辞書に載っていることは少ないですが、学習者にとってはありがたい情報だと思います。

④広く使われ意味がとらえにくい形容詞は、その課の本文が理解できる範囲の説明で、日本語の勉強を続ける過程で少しずつ使い方に慣れてもらえればよいという扱いが必要です。たとえば、「地味」（第7課）「派手」（第8課）などがそうです。「派手な人／服装／宣伝」「地味な性格／服／生活」などは、「目立つ／目立たない」程度の理解でいいと思います。使われる文によって、話し手が評価しているのか、批判しているのかは、なかなかわかりにくいと思われます。時間をかけて学んでもらえばよいでしょう。『中級』では出てきませんが、「渋い好み」「穏やかな人柄／天気」などもこのグループだと考えられます。

## ¶ 【動詞】について

動詞を扱う際には、次のような点に注意するとよいと思われます。

①動詞を扱う際、何よりも大切な点は、**ともに使われる助詞を説明して、覚えてもらうこと**です。たとえば「表す」（第7課）「表れる」（第19課）は、他動詞、自動詞（という言葉を知らない学習者もいるかもしれませんが）として扱うのではなく、「～ガ～ヲ～ニ表す」「～ガ～ニ表れる」と教え、「[人・事柄]ガ[感情・状況]ヲ[表情・状況]ニ表す」と覚えておくことがこの動詞を広く使えるようになることにつながると考えられます。

②動詞には、「変わる」（第3課）や「与える」（第12課）など、前にいろいろな名詞が来るものと、「（木／石を）削る」（第20課）などのように**名詞が決まってしまう動詞**があります。「身を削る」などは後に勉強してもらうとして、中級の段階でわかる語彙を使って、「削る」の基礎的な意味を理解してもらうことも、これからの学習に役立つと考えられます。

「思い出す」（第13課）などは、学習者が自分で想像してどんな名詞や事柄が来るかを理解し



てくれると思います。たとえば、「終える」(第19課)は、「やらなければならないことを、話し手が努力して終わらせる」という気持ちが込められていると教え、『中級』の段階で知っている言葉を使って「宿題／仕事を終える」と使うと教えておけば、「一日／人生を終える」が出てきたときの理解の助けになると思います。「重ねる」(第15課)など、そのグループに入る動詞はたくさんあります。

基本的な意味を理解してもらうために、まずよく使われる例を既習の言葉や表現と一緒に理解してもらうことは、新しい動詞を紹介するときに学習者に役に立つと思われま

## ¶ [副詞] 等について

副詞は、役割に応じていろいろなグループに分け、名前がつけられたりしますが、出てきた順に、話し手のどんな気持ちを伝えようとしているかを知ってもらうことが大切だと思われま

①後に来る言葉がだいたい決まっている副詞があります。『中級』では出てきませんが、「どんどん」「ますます」などは、後に来る動詞が決まっています。「どんどん進む／増える／発展する」などは、「勢いを持って、かなり大規模に物事が進行する」ときに使いますし、「ますます」には「どんどん」と同じような意味に加えて、「前と比べて」という意味があります。こうした点は、新しい言葉として学ぶときに添えると役に立つと思われま

②時間と関係する副詞の説明にも、話し手の気持ちを添えることが大切です。たとえば、「すぐ」(初級)「まもなく」などは、学習者が覚えて使いにくい言葉だと思います。

例 まもなく3番線ホームに電車が到着します。

例 駅前に新しいショッピングセンターがまもなくオープンします。

学習者には、「まもなく」が「時間的にどのくらい」という理解ではなく、「それほど時間が経たないうちに」という気持ちを伝えようとする言葉だと理解してもらうことが大切です。

③誰の気持ちを表しているのかをはっきりする必要があります。「意外に」が第12課で使われていますが、誰にとって「意外」なのかが難しいと思われま

例 部長が社長に相談してみると、意外に簡単にOKが出ました。

この例で、「意外に」と思ったのは、相談に行った部長ではなく、このことを伝えている話し手が「意外だ」と思ったという意味です。『中級』では出てきませんが、「あくまでも」などが同じグループです。

例 社長は、あくまでも賛成しようとはしませんでした。

例 空は、あくまでも青く澄みきっていました。

どちらも、これを伝えようとした話し手の気持ちが表れています。

④音を繰り返す言葉、たとえば、上の①にあるような「どんどん」「ますます」などですが、学習者にとって大変学びにくい言葉です。広い意味を持っている場合が多いので、出てきたときに、ひとつずつその意味を紹介し、日本語学習を進めながら、慣れて身につける表現だと思われま

例 疲れてしまって、ふらふらしながら歩いています。

例 何も考えず、ふらふらと後をついて行きました。

例 犬がワンワンとほえています。

例 大きな音で、会場全体がワンワンと鳴り響くようでした。

『中級』では、「いらいら」(第10課)と「そこそこ」(第20課)が出てきますが、これらはそれほど広い意味で使われないので、本文で使われる意味を理解することで十分だと思います。

以上が、新しい語彙・表現を学習するときの説明に添えられれば、学習者の役に立つと考えられる点です。『手引き』の各課に〈新しい言葉〉というセクションがありますが、ここで触れた各課に共通する点は、原則として取り上げていません。

各課の初めに設けられる新語・表現を紹介する時間は、決して「辞書クラス」ではありませんので、言葉や表現に添える役に立つ情報をどこまで抑えるのかという点は、教える側が考えなければならない点です。説明が多すぎると、かえって混乱をきたすことになりますので、考えて扱うことが必要だと思います。学習者が学んだ言葉を使えるようになる、辞書に載っていない説明で学習者が使うようになるために役に立つ情報を提供する、その2点が大切だと考えられます。

『中級』各課の〈新しい言葉〉に取り上げられた新語・表現には、初級段階で学習しているであろうと考えられる語彙が省かれています。(特殊な物を除いた)一般的な動植物の名前や、「カラオケ」や「コンピュータ」など、どこでも使われているであろうと思われる言葉も、新語として取り上げませんでした。省かれた言葉が学習者にとって新しい語彙・表現である場合、補っていただければと思います。



### いっしょに考えましょう と 読みましょう

各課で、このふたつを並べてその関連を述べています。各課の本文は、その課のテーマの一面を取り上げていますが、どのような意図で、どのような一面をとらえようとして書かれた本文であるかという説明をしています。時には、その一面をさらに考えていく際に、参考になると考えられる類似の項目も並べました。そして、〈いっしょに考えましょう〉では、各課の初めに何を話題に取り上げ、〈読みましょう〉につなげるかという著者の意図が説明されています。



### 答えましょう

このセクションは、本文の内容がどれだけ理解できているかを学習者、教師がお互いに確認するためのセクションです。本文は、第1～10課が3段落、第11～20課が4段落で構成されていますが、〈答えましょう〉Aには、それぞれの段落に対して、第10課までは3問ずつ、第11課からは2問ずつの質問が用意されています。また、Bには、学習者が読む力を伸ばす目的で、本文にははっきり書かれていないけれども、本文全体に関係する質問が準備されています。

〈答えましょう〉には、もうひとつの目的があり、ここで質問や答えをやり取りすることで、自分の考えをまとめて話す練習をすることも目的としています。A, Bでどのように話す練習をするか、第1課を例にして説明します。まずは〈答えましょう〉Aの運用例です。

#### A 「なぜなぜ」の文を読んで、質問に答えましょう。

1. 筆者(=この文を書いた人)はどんな人ですか。
2. 子供が英語を勉強することをどう思っていましたか。
3. どうして子供に英語の勉強のことをたずねないのですか。

[ここまでの第1段落に関する質問]

4. 筆者は、何をなぜなぜかなと思いましたか。

5. 子供はどんな話をしましたか。
6. 生徒のひとりがどんなことを言いましたか。  
[ここまでが第2段落に関する質問]
7. 子供たちが口々にいろいろなことを言い始めたとき、先生はどうしましたか。
8. 子供の話を聞いて、筆者はどう思いましたか。
9. 筆者が次の話を楽しみにするようになったのは、どうしてだと思いますか。  
[ここまでが第3段落に関する質問]

この設問の「本文の理解度チェック」と「話す練習」というふたつの意図を生かして、初めは1問ずつ答えを求め、次に、段落ごとの3つの設問をまとめて、以下のように口頭で進めます。

教員：筆者(=この文を書いた人)はどんな人ですか。

学習者：小学生のお母さんです。

教員：そうですね。子供が英語を勉強することをどう思っていましたか。

学習者：話せるようになったらいいな、でも、きらいになったらこまるなと思っていました。

教員：そうでした。心配していたのに、どうして子供に英語の勉強のことを尋ねないのですか。

学習者：子供にいやがられてはいけないからです。

教員：そう、筆者はそう言っていますね。じゃあ、次の質問です。

続きの6問は省略しますが、同じように教員、学習者の間で一通りのやり取りをします。それから、だいたい受け答えができるようになった時点で、今度は、学習者同士でも同じようなやり取りをさせて、受け答えの練習をします。そのとき、1～9問すべてを一度に行うのは無理なので、段落ごとに区切って練習するのがいいでしょう。また、上の例にもあげていますが、質問の受け答えに、「そうですね」「では」「じゃあ」などといった表現を加え、やり取りが自然かつ滑らかに続くように、教員と学習者がやり取りを練習する最初の段階で例を示しておくのも、練習をしやすくする方法だと思います。

学習者が上のやり取りが十分にできるようになった時点で、「皆さんは、何歳から英語の勉強をしましたか」といった学習者の経験を尋ね、2番以降を少し変えて「皆さんのご両親は、英語の勉強をどう思っていましたか」「ご両親は、英語の勉強のことを尋ねましたか」「それは、どうしてですか」と練習を進めるのも、話す力を大きく伸ばすひとつの方法だと考えられます。

「初級」から「中級」へ移る段階で、教える側が留意すべき大切な点があります。初級段階では、何かを読んでからのやり取りは、読んだものの中にある「書いてあること」についてのやり取りです。「～さんは、何時に～しましたか」「どこで～しましたか」といった類の、文中に書かれている事柄のやり取りです。いわゆる読解力をつけるためには、「はっきりと書かれてはいないが、文を読むとわかること」を読み取る力をつける必要があります。〈答えましょう〉Bはそれを目指した練習です。第1課の例を見てみましょう。

## B 友だちと次のことを話してみよう。

1. 「寝る前に顔を洗いなさい」という場面で、子供たちが質問したのはどうしてですか。
2. 先生の話にある「世界にはね…」はどんな説明だったと思いますか。

上のような質問が設けられていますが、学習者からはいろいろな答えが返ってくると考えられます。1 番の質問に対しては、「自分は、寝る前に顔を洗わないから」「自分と違うから」など、2 番の質問には、「世界にはいろいろ違うことがあります」とか「世界にはいろいろな人がいます」などと答えが返ってくると思います。どうしてそう思うのか、文中のどこからその答えを引き出したのかを尋ねることで、読み取る力を伸ばすことになると思います。練習の方法としては、まず、隣同士でやり取りをしてもらった後で、「どんな答えが出てきましたか」と尋ね、話を続けるといいと思います。そこで出された意見が、後の〈話しましょう〉〈まとめましょう〉の下準備となり、テーマを深めていくことができます。

## 使いましょう

各課に設けたこのセクションは、新規学習項目として取り上げた文法項目をどのように、どこまで教えればいいのかという提案をしているセクションです。**形**と**用法**に分けて説明しています。

**形**では、練習する項目で「動詞」や「形容詞」がどのような形で使われるかをあげていますが、よりわかりやすくするために、「～形」という言葉を使わずに、「動詞」や「形容詞」などの具体的な言葉を使っています。そして、後に続く**用法**の例文の中で、そこに並べた動詞や形容詞を使っています。たとえば、第 16 課の〈使いましょう〉A では次のようになっています。

### A 「～ものだから」

- 形** **形容詞** 寒い／寒かった＋ものだから  
心配な／心配だった＋ものだから
- 動詞** 食べる／食べた／食べない＋ものだから

#### **用法**

- 例** 現地は夏でも寒いものですから、持って行く装備が大変です。
- 例** 去年の冬が寒かったものですから、今年は部屋の暖房を改善しました。
- 例** 風が強くなって、家のほうが**心配な／心配だった**ものですから、今日は早く帰りました。
- 例** 子供たちがよく**食べる**ものですから、ほとんど毎日買い物です。
- 例** 当時は、子供たちがよく**食べた**ものですから、食費が大変でした。
- 例** 母があまり**食べない**ものですから、ちょっと気になります。

**用法**では、『中級』でどこまで教えるかという点を中心に、このように教えてみてはという提案をしています。必要に応じて、関連する初級段階での学習項目も取り上げて、練習する項目との関係を述べています。新しい学習項目については、項目によって、それを授業の中でどう扱えば、学習者にとって受け入れやすいかという点に触れました。また、〈使いましょう〉では取り上げていませんが、学習項目と関連する点を**参考**として添えました。理解の役に立つと思われたら、触れておいてもよいと思います。

『中級』〈使いましょう〉の例文の中には、( )をつけた部分があります。たとえば、第 7 課〈使いましょう〉C「せっかく」の例文は次のようになっています。

1. せっかくの旅だから、(我慢しないで、) ちょっといいホテルにとまりたい。
2. せっかく送ってくれた写真なので、(自分ひとりで喜んでいないで、) みんなに見せようと思います。
3. せっかく友達と海に行ったのに、途中で雨にふられて泳げなかった。

これは、『手引き』の **用法** で、「せっかく」は、現在の日本語では「時間をかけて／苦労して／いつもはしないことなのに／めったにないことなのに、～したが、思っていたようにならなかった／無駄になってしまった」という意味で使われると説明をしていますので、それに合わせて、話し手が「うまくいかなかった」とか「～ないで」という気持ちを込めて使う表現だということを ( ) 内に補ったものです。( ) 内は、実際に言ってもかまわないし、言わなくても聞き手が理解してくれるという意図で添えています。こういう紹介の仕方をしておけば、学習者が実際に使うときに役立つのではないかという提案です。

〈使いましょう〉の授業は、口頭でのやり取りで進めると、話す力の向上につながります。また、宿題として〈使いましょう〉の答えを書いて提出させることで、書く練習にもつなげます。以下の「6. 『中級』と『ワークブック』を使った授業組み立ての例」を参考にしてください。

### **まとめましょう**

ここでは、『中級』の〈まとめましょう〉の[解答例]と[まとめの解答例]を載せています。〈まとめましょう〉は、口頭で要領よく本文をまとめられるように設けられた質問で、そのやり取りを通して話す力を伸ばすためのセクションです。また、学習者に作文の形でまとめてもらうことも、話し言葉と書き言葉の違いを意識するよい練習になると考えて、[まとめの解答例]を載せました。

## **4. 『ワークブック』の構成**

『中級』で学習した項目が十分理解できているかどうかを学習者自身が診断する目的で『ワークブック』が作成されています。課ごとに以下に詳しく述べる4つのセクション、〈読みましょう〉〈聞きましょうA〉〈聞きましょうB〉〈練習しましょう〉があります。いずれのセクションも『中級』〈読みましょう〉と〈使いましょう〉で練習した項目以外、一切の新規学習項目はありません。また、その課で新しく学習した語彙・表現と文法項目ができるだけ繰り返し使われていますので、よい復習になると思います。

中級段階での学習で大切なことのひとつに、初級段階で学習したことを応用させ、達成感を感じさせるという点があります。上に「学習者自身が診断」と書きましたが、すべてのセクションで、学習者が「わかるようになった」と達成感を感じられるような構成を心がけました。

## **5. 『ワークブック』各セクションの詳細**

### **読みましょう**

『中級』〈読みましょう〉と同程度の長さで書かれた文章で、各課のテーマに関連して、〈読みましょう〉とは違う観点を取り上げた内容です。『中級』で学んだ新規学習項目が理解できている

かどうかを確認すると同時に、テーマに関する別の見方を理解することで、学習者が達成感を持てるように書かれています。各課の新出漢字には、ルビが振られています。

### 聞きましょう A

『中級』〈読みましょう〉の内容について、短い会話の聴き取りと書き取りの練習です。会話独特の言い方を理解することと、新規学習項目が身についたかどうかを音で確認しながら、テーマの別の観点も考えてもらうことを目的としたセクションです。聴き取りにくいと考えられる部分を、短い書き取り練習にしています。

### 聞きましょう B

各課のテーマをさらに深める意見や反対意見を取り上げた、授業や講演の形をとった聴き取りと書き取りの練習です。ある程度の長さを持った内容のある話を理解することを目的としています。授業や講演の中では、いわゆる「書き言葉」が使われることもあるという例を示す目的もあります。まず全体を聞いた後で、再度聞きながらノートを取り、まとめる練習が添えられています。

### 練習しましょう

このセクションには、「漢字の練習」「言葉の練習」「文法の練習」があり、「漢字の練習」では、『中級』の「『テーマ別 中級から学ぶ日本語』を使っていただく先生方へ」で説明した、「A: 読み書き両方を練習する漢字」「B: 読み方を練習する漢字」に分けて練習問題が設けられています。原則としてA, Bグループのすべての漢字が練習できるよう問題が準備されています。「言葉の練習」では、〈読みましょう〉に出てくる慣用的な表現や副詞などが取り上げられています。「文法の練習」では、初級段階での復習を含めて、助詞の練習、動詞や形容詞の活用を取り上げています。

練習問題を作成する際に特に留意した点は、問題文や例文の中にそれまでの課で学習した語彙・表現と文法項目をできるだけ多く組み入れ、学習者が反復練習できるようにした点です。既習項目の補強につながればと思います。

## 6. 『中級』と『ワークブック』を使った授業組み立ての例

『中級』の到達目標は、「①日常身近に体験する出来事や社会的な話題について、自分の感想や考えが理由とともに説明できること」「②異なる視点や考えを持つ相手とも、興味・関心を持って情報や意見の交換ができること」としました。ここでは、学習者が達成感を感じながら学習を進めるために、『中級』と『ワークブック』（以下、『ワーク』）を使って、どのような時間配分で授業を組み立てるかの例を、ふたつの場合に分けてあげておきます。【導入】【練習】の段階を経て、【応用】の際には、目標到達を目指した様々な教室活動を取り入れていただければと思います。

1) 3日で1課(1日5コマ/1コマ50分)の授業例

	授 業			宿 題
	1コマ目(50分)	2・3コマ目(100分)	4・5コマ目(100分)	
<b>1日目 【導入】</b>	漢字を練習しましょう	新しい言葉 使いましょう (口頭で導入)	いっしょに考えましょう 読みましょう 答えましょう	使いましょう (文完成) 答えましょう
<b>2日目 【練習】</b>	使いましょう (宿題チェック)	聞きましょうA まとめましょう	練習しましょう	まとめましょう
<b>3日目 【練習】 と 【応用】</b>	聞きましょうB	読んでみましょう 話しましょう	作文	読んでみましょう 次の課の 漢字と語彙

● **1日目【導入】**

1日目の5コマは、新出語彙・表現およびテーマと本文の【導入】を行います。

- ▶ **1コマ目:** 新しい課に入る前に、〈漢字を練習しましょう〉にある新出漢字を予習するように指示しておきます。そして、授業では読み方、書き方の確認をします。さらに、新出漢字を含む語彙を使った読み書き5問程度の漢字クイズを毎日課すなど、少しずつ定着を図ります。
- ▶ **2・3コマ目:** 新しい課に入る前に、〈新しい言葉〉を予習するように指示しておきます。授業では、『手引き』を参考に辞書を補う説明や必要な練習をし、できるだけ使う機会を設けるようにします。次に、〈使いましょう〉の項目を口頭で導入、練習し、2日目の授業に向けて、練習にある文完成を宿題とします。
- ▶ **4・5コマ目:** テーマ導入ならびに本文読解の時間です。すべての時間に、できるだけ口頭での練習を多く取り入れ、書いて確認する作業は宿題とするようにしましょう。ここでは、〈読みましょう〉を精読した後、上にあげた〈答えましょう〉運用例を参考に、口頭で内容確認のやり取りをします。〈答えましょう〉の質問に書いて答える作業は宿題とします。

● **2日目【練習】**

前日に習ったことをさらに定着させるよう、4技能を駆使して練習します。

- ▶ **1コマ目:** 〈使いましょう〉(宿題チェック)では、文の誤りを対面で指摘、訂正したり、誤りやすい箇所をクラス全体で共有します。練習にある文完成が宿題になっているので、それをチェックする時間を設けて、新しい学習項目の使い方を再度確認すると効果があります。
- ▶ **2・3コマ目:** 次に、『ワーク』の〈聞きましょうA〉を使い、これまでに習った語彙や表現はもちろん、テーマとも関連づけて内容を聴き取れるか確認します。また、〈読みましょう〉を復習し、〈まとめましょう〉の設問で口頭での要約の練習をします。さらに、宿題として、口頭でまとめた内容を作文として書かせて確認します。
- ▶ **4・5コマ目:** 『ワーク』の〈練習しましょう〉を使って、その課で習った学習項目を復習します。

### ● 3日目【練習】と【応用】

学習目標到達に向けて、運用力を高めるための教室活動（〈話しましょう〉や作文など）を行います。

- ▶1 コマ目：前日の【練習】の続きとして、『ワーク』の〈聞きましょう B〉を使って、聴き取り練習をします。
- ▶2・3 コマ目：既習の語彙・表現のみで書かれた〈読みましょう〉を一定の時間内に読み、内容を確認します。最後に、〈話しましょう〉の設問をもとにその課のテーマについて話し合います。
- ▶4・5 コマ目：課のテーマおよび話し合った内容を振り返り、作文を書きます。作文はすべての課で課す必要はありません。必要に応じて練習してください。

### 2) 4日で1課（1日4コマ／1コマ50分）の授業例

	授 業		宿 題
	1・2 コマ目 (100分)	3・4 コマ目 (100分)	
<b>1日目</b> 【導入】	漢字を練習しましょう 新しい言葉	使いましょう (口頭で導入) いっしょに考えましょう 読みましょう	使いましょう (文完成)
<b>2日目</b> 【練習】	使いましょう (宿題チェック) 答えましょう	聞きましょう A まとめましょう	答えましょう まとめましょう
<b>3日目</b> 【練習】	聞きましょう B 読みましょう	練習しましょう	読みましょう 次の課の 漢字と語彙
<b>4日目</b> 【応用】	話しましょう (または作文)		

進め方は、1) の15コマを使う場合と同様です。担当のコマが【導入】に当たるのか、【練習】か【応用】かによって、前日までの学習を振り返りながら、授業の目標を立ててください。学習項目の定着を図りつつ、テーマへの理解を深め、自らの意見や感想をまとめて、わかりやすく伝えることができるように、1課分の学習を段階的に進めていただくとよいと思います。

## 7. 付属 CD について

CDには、『中級』各課の〈読みましょう〉の音声が入録されています。必要に応じて、教室でお使いいただければと思います。また、学習者の予習・復習のために、CDと同内容の音声を、研究社HP (<http://www.kenkyusha.co.jp/>) より無料でダウンロードできるようにしました（ただし、第16課の童謡「うみ」の部分は、著作権上の理由から、ダウンロード音声には含まれていません）。



# 第1課

## まなぶ



### テーマ

この課では、「外国語を学ぶこととは」を考えます。学習者は、『中級』を手に入れている時点で、日本語という外国語を学習しています。また、それ以外の言語の学習経験を持った人も少なくないと思います。学習の過程で、学習者が共通して体験した面白いこと、難しいことについて意見交換しながら、外国語学習という作業がどんなことなのか一緒に考えてみたいと思います。



### 新しい言葉

- **心配**<sup>スル</sup>: 「心配<sub>ナ</sub>」と表示しなかったのは、名詞の前では「心配なこと」と使う以外に、あまり使われないため。それも「心配事」という名詞のほうがよく使われる。「～が/で心配だ」という形で使うことが多いと教えておく。
  - **口を出す**: 自分とは関係のない第三者の話に意見を述べ、それを言われた側が「君には関係ない」と不愉快に思う状況などに使われる。
    - 例 課長が部下に嫌われるのは、関係ないことにまで口を出すからだ。
  - **ある** (日): 「ある人」「ある所」という形で使うことが多い。よくわからないとき、はっきり言いたくないときに使う。
  - **～(だ)って**: 伝聞に使う口語表現。次のように使われる。
    - 「(名詞) って」 ○例 明日は雨だって。
    - 「(形容詞) って」 ○例 とても寒い/寒かったって言っていました。  
○例 そこは静かだ/静かだったって聞きました。
    - 「(動詞) って」 ○例 山田さんも行く/行っただって言っていました。
  - **そこで**: 何か困ったことや問題があり、それが解決するように「～した」というとき、また、何か特別な状況を知る/機会を得ることになり、「～した」というときに使う。
    - 例 明日約束していた友達の手伝いがどうしてもできなくなった。そこで、Aさんに行ってもらうように頼んだ。
    - 例 交通事故でたくさんお金がいることになった。そこで、母に電話して送ってもらうことにした。
    - 例 前から見たいと思っていた絵が展示されるという宣伝を目にした。そこで、さっそく出かけてみた。
- 「そこで」は「それで」と同じように、「前の文で述べられたことが理由になって～した」という意味で使われるが、上で説明したように、理由になる内容が問題や特別なことでなければ、「そこで」は使えない。
- 例 友達が急に来られなくなった。それで/そこで、食事会は来週にした。
  - 例 今日は朝からとてもいい天気だった。それで/×そこで、散歩に行った。